

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：34444

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11234

研究課題名（和文）高齢患者の術後せん妄予防・緩和のためのハンドマッサージ法による全人的アプローチ

研究課題名（英文）Holistic approach using the Hand Massage method for prevention of postoperative delirium in elderly patients

研究代表者

佐藤 都也子（Sato, Tsuyako）

四條畷学園大学・看護学部・教授

研究者番号：30321136

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：高齢患者の術後せん妄（以下POD）一次/二次予防を目的として、ハイリスク患者の入院生活を支援する多職種チームでの活動を通して、多因子介入のひとつとしてハンドマッサージ法の臨床適応を検討した。その結果、看護師中心の多職種チームでの高齢患者PODの予防に有用な介入方法の構築を課題とした研究計画を立案した。

また、患者・家族もチーム医療の一員であることをふまえ、PODの認識やPOD疑似体験時にとり得る態度について、中高年者を対象に調査を実施した。

その結果、性別・性格特性や主観的健康統制感から術後せん妄疑似体験時に取り得る態度を予測できること、PODの術前認知が発症や重症度関与していることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、超高齢化や医療の高度化に伴い、手術療法を受ける高齢者は増加し、PODの発症が問題となっている。POD発症は、死亡率を高め、在院期間が長期化し、退院後の認知機能障害のリスクを高める。したがってPOD予防は、高齢患者及びその家族の生活や生命の質を維持・向上するだけでなく、医療費の増大を抑えることにもつながる。そして、POD発症要因のうち、術後の日常生活や環境の変化、不安などに対するケアは、生活モデルに基づく看護ケアであると言える。

したがって、高齢患者を生活者としてとらえ、看護師中心の多職種チームにより、PODの予防を可能とする有用な介入方法の構築には意義があると考えている。

研究成果の概要（英文）：Postoperative delirium (POD) is an acute brain dysfunction that can patients of their dignity. We conducted a literature review of the effectiveness of the Hand Massage as one of the multifactorial interventions by the multidisciplinary team to prevent postoperative delirium (POD) in elderly patients. As a result, the research plan was designed to develop a useful intervention method for the prevention of POD in elderly patients in a nurse-centered multidisciplinary team.

In addition, we surveyed the perceptions of POD of patients and family members who are part of the team medical care. In addition, we clarified the relationship of individual attitudes toward simulated POD to the Health Locus of Control and the personality traits. As a result, Gender differences were evident in attitudes during the POD simulation. It was suggested that HLC and personality traits play an influential role in predicting certain attitudes. And it was suggested that POD knowledge was also involved.

研究分野：看護学

キーワード：高齢者術後せん妄 多職種チームによる多因子介入 看護実践としてのタッチケア ハンドマッサージ法 術後せん妄予測因子

1. 研究開始当初の背景

超高齢化や医療の高度化に伴い、手術療法を受ける高齢者は増加し、高齢化も進んでいる。その結果、高齢であることが背景因子となり、術後せん妄発症が起こっている。発症頻度は報告によりさまざまであるが、国立長寿医療センターの調査では 80 歳以上の待機手術患者での発症率は 73.9%であった（北川，2013）。術後せん妄は、安静保持困難、各種カテーテルの自己抜去や創部ドレッシングの除去、酸素マスクなどの装着困難など、術後経過に大きな影響を及ぼし、患者の予後にも影響を及ぼす深刻な問題である。そのため、患者の安全を第一と考え、やむを得ない場合との判断で身体拘束が実施される場合が多い。ここでの“やむを得ない場合”とは、患者の安全を守り、治療効果を最小の侵襲で最大の効果を得るためには、身体拘束以外に適切な代替方法がない場合を指す。しかし、身体拘束は自由に動く権利を制限するために、人権侵害を引き起こすリスクがある。また、身体拘束がストレスとなり、せん妄症状を遷延・増悪させる危険性も否定できない。したがって、可能な限り身体拘束以外の代替方法を適応し、身体拘束ゼロを実践していくことが必須である。

このことは、医療・福祉領域では当然のこととして理解されている。しかしながら、人権擁護の観点から問題があるだけでなく、高齢者の QOL（生活の質）を根本から損なう危険性を有しているとして 1999 年（厚生労働省）に「身体拘束ゼロ」作戦の推進が始まった以降も、身体拘束は実施されており、拘束死の問題も起こっている。一方で、身体拘束ゼロを可能にしている高齢者福祉施設（志自岐他，2004）などもあり、金沢大学附属病院では高度急性期医療の場で身体拘束ゼロを可能にしている（小藤，2018）。つまり、看護の本質（看護者の倫理綱領，2003）として備わっている、文化的権利、生存と選択の権利、尊厳を保つ権利、そして敬意のこもった対応を受ける権利などの人権を確実に尊重することで、身体拘束ゼロを可能にしていく必要があると言える。また、身体拘束が“やむを得ない”として実施される場合、「看護者の倫理綱領」条文 1 の人権擁護と条文 6 の安全確保のジレンマが生じ、結果、安全確保が優先される。しかしながら、人権が擁護されない安全は存在しないのである。そして、看護は日常生活援助を専門としていることから、QOL を根本から損なう危険性がある身体拘束を、確実に“ゼロ”にしていくことは必須の課題であると考えられる。そのためには、科学的根拠に基づいた「身体拘束ゼロ」を可能とする援助方法を確立していく必要がある。

統合医療は、全人的アプローチ・自然治癒力・予防という観点から、さまざまな医療を融合し患者中心の医療を行うものである（「統合医療」のあり方に関する検討会，2005）。統合医療の全人的アプローチは、看護の本質と共通した理念であると言える。そこで本研究では、ハンドマッサージ法（以下 HM 法）を統合医療の一介入方法として位置付けている。

2. 研究の目的

「HM 法は、高齢手術患者における術後せん妄の予防および症状緩和に効果的か？」を学術的問いとして、次の 2 つを目的とする。

- 1) HM 法を統合医療の一介入方法として位置付け、高齢手術患者における術後せん妄の予防および症状緩和のためのハンドマッサージ法の効果を実証する。
- 2) 高齢周手術期患者に HM 法を実施した看護師から、患者との関係性や関わり方にどのような変化をインタビューし、ハンドマッサージ法を用いたより効果的な周手術期看護の在り方の検討を試みる。

※ COVID19 感染拡大により、病院施設での実証研究が中断されることになったため、目的と方法を再検討した。

2. 研究の目的（改訂版）

- 1) 高齢手術患者における術後せん妄予防のための多職種チームによる効果的な多因子介入，さらに介入のひとつとして HM 法のより効果的な介入方法について明らかにする。
- 2) 中高年者の「術後せん妄」発症を疑似体験したときに取り得る態度と、「術後せん妄」の認知度や体験の有無、主観的健康統制感や性格特性とに関連があるかを明らかにする。

3. 研究の方法

- 1) 文献検討
- 2) 中高年を対象とした web アンケート

4. 研究成果

- 1) 高齢患者を生活者としてとらえ、生活モデルに基づく看護師が中心の多職種チームによる家族のエンパワメントを活用した高齢入院患者の術後せん妄を予防できる有用な介入方法を検討する研究計画を立案した。（「看護師中心の多職種チームによる高齢患者術後せん妄の予防に有用な介入方法の構築」24K14158）
- 2) 研究対象は、40-79 歳までの術後せん妄未体験中高年者 865 人（男性 441 人・女性 424 人，平均年齢 59.1 歳）であった。
 - ① 術後せん妄については、ほとんど認知されていなかった。
 - ② 術後せん妄を疑似体験（文章で説明）したときに取り得る態度には、男女差が見られた。
 - ③ さらに、術後せん妄を疑似体験（文章で説明）したときに取り得る態度を予測する上で、主観的健康統制感と性格特性が影響的な役割を果たすことが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐藤都也子	4. 巻 25
2. 論文標題 高齢者の術後せん妄に関する研究の動向と術後せん妄対策における周術期看護の役割	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 生老病死に行動科学	6. 最初と最後の頁 3-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/83192	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐藤 都也子・竹 明美・平上 久美子 他
2. 発表標題 中高年者の「せん妄・術後せん妄」の認知度と「術後せん妄」発症予測時の態度
3. 学会等名 第64回日本老年医学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤 都也子・竹 明美・平上 久美子 他
2. 発表標題 中高年者の「術後せん妄」発症予測時の態度と主観的健康統制感の関連
3. 学会等名 日本老年社会科学会第64回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤 都也子 他
2. 発表標題 多職種連携高齢者ライフケアチームにおけるせん妄ハイリスク薬対策の実態と今後の展開
3. 学会等名 第33回日本老年医学会近畿地方会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 片山 圭子・佐藤 都也子 他
2. 発表標題 看護師中心の多職種チームによる高齢入院患者に対するせん妄予防対策の効果
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hirakami, K., Kito, K., Sato, et. al.
2. 発表標題 The Significance of Introducing Nursing Touch Care Into Psychiatric and Mental Health Nursing Methodology; Implementing Hand Massage.
3. 学会等名 The 7th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (WANS) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山崎裕美子, 佐藤都也子, 竹明美 他
2. 発表標題 ライフサイクルと活動の場でつなぐタッチングケア - ポストCOVID-19時代のナーシングタッチ -
3. 学会等名 第40回 日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山崎裕美子, 佐藤都也子, 竹明美 他
2. 発表標題 ライフサイクルと活動の場でつなぐタッチングケア - 研究・社会貢献・教育の現在と近未来 -
3. 学会等名 第39回 日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	竹 明美 (Take Akemi) (30344568)	京都橋大学・看護学部・准教授 (34309)	
研究分担者	平上 久美子 (Hirakami kumiko) (00550352)	名城大学・健康科学部・教授 (28003)	
研究分担者	山崎 裕美子 (Yamasaki Yumiko) (00285321)	姫路獨協大学・看護学部・教授 (34521)	
研究分担者	山岸 千恵 (Yamagishi Chie) (30382815)	京都看護大学・看護学部・准教授 (34327)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------